

きた外国貿易や国際収支関係の1巻が発刊当初の計画に加わっていなかったことは当時奇異の感をいだかせた。ただ第1巻「国民所得」には今回の第14巻の著者の1人が行なった「第6章 海外収支の推計」が含まれていたが貿易関係の詳細については十分なスペースがなかった。一橋大学経済研究所編集の『解説経済統計』1953、岩波書店や『解説日本経済統計』1960、岩波書店が必ず貿易と国際収支について独立の章を設けていたことから見ても今度の第14巻の追加は適切な配慮というべきであろう。

本巻は他の巻と同じく第1部分分析、第2部推計、第3部資料とから構成されているが、「重点を推計と資料におき」分析は推計結果の語る事実を整理する程度にとどめた(編集者のことば)という編集方針から少しそれてあえて「分析」を試みたため分析篇の比重が他の巻に比して大きくなっているのが特徴である。また「書庫のなかで使用された形跡もないほりにまみれた貴重なデータの発掘(編集者のことば)よりも「既存の統計資料を齊合的に整理し、分析に向くように加工する」ことを「作業の中心」にしたと著者たちは謙虚に述べている。戦前の旧中国についても海関統計だけは比較的整備されていたし、わが国の税関の貿易統計も明治以降、いな開国の1859年以降比較的とのっており、とくに明治15年以降は『日本外国貿易年表』があり、またこれらをもとにした東洋経済新報社『日本貿易精覧』(明治以来1933年まで)があり、とくに後者は戦後古書市場で稀少本となり復刻された幻の名著である。あるいはその存在が『長期経済統計』シリーズから貿易関係の1巻を省かせた一因かも知れない。

本書の第1の積極的貢献はこれらの比較的整備された既存統計を再編成して、貿易統計の商品の17分類から産業分類(工業品10分類、一次産品4分類)に組み替えたことである(山澤氏)。これはすでに塩野谷祐一氏によって先鞭がつけられていた作業であり、工業品分類は同じ『長期経済統計』第10巻の篠原三代平『鉱工業』の分類に合せてある。ついでながら貿易商品分類から産業分類への組替え作業は京都大学経済研究所の行澤健三・前田昇三両氏の1969年以來8年の努力の結果が『日本貿易の長期統計』1978、同朋社、として刊行されている。これは商品・地域の貿易マトリックスを1902, 1912, 1925, 1935年について戦後の1968年と対照した労作である。本巻の著者(山澤氏)は組替え作業を明治以來1939年まで(1940年の『外国貿易年表』は戦争のため公刊されていない)と1951年以降とについて累年行なった。

山澤逸平・山本有造

『貿易と国際収支(長期経済統計14)』

東洋経済新報社 1979.2 xx+268 ページ

一橋大学経済研究所の日本経済関係の人々によって1965年以來逐次刊行されつつある『長期経済統計—推計と分析』シリーズは発刊当時全13巻の予定であったが、今度第14巻が追加された。それがこの『貿易と国際収支』である。「日本経済の明治以降の経済発展の姿」を「国民所得およびその構成要素の長期系列の推計」によってあとづけようというこのプロジェクトは既に一世代にわたってたゆみなく続けられ、このシリーズも10冊が刊行された。そして広く世界中の日本経済研究者によって重宝され、極めて高い国際的評価をえている。明治以降の日本経済の発展にとって重要な役割りを演じて

ただし産業別-地域別のクロスの作業は行っていない。

第2の積極的貢献(山澤氏)はこの類別商品のデフレーターを算定するために、貿易商品構成の変化を反映させるため戦前を6個の区間に分け各区間初期の3年間を基準年次とし、『日本貿易精覧』掲記の主要輸出入個別品目を選び、輸出入金額を物理的数量で除して単価指数を計算し、これら個別指数を各基準年次ウエイトで加重平均して産業類別指数を作成、これらを接続して1934-36年平均を100とした戦前の類別輸出入価格指数を作成するという忍耐強い作業を完成させたことである。最後に類別指数を用いて各類別の1934-36年価格表示の金額系列を求め、これらと時価表示の金額との比率によってインプリシットに大類別(工業品、一次産品および総合)のデフレーターが計算されている。評者はこの第2の貢献を最高に評価したい。

第3の積極的貢献はもう1人の著者(山本氏)によってなされた戦前戦後の国際収支系列の統合である。これについては1902(明治35)年以降は大蔵省の公表統計があり、公表統計のない明治の34年間については評者がかつて推計したもの(著者が「建元推計」と呼んでいるもの)がある。しかし居住者の範囲(e.g.「帝国」領土、「本土」)、国際収支統計項目の定義(e.g.「国際連盟方式」、「IMF方式」)に相異があるので、山本氏はこれらに周到綿密な調整をして一貫した長期系列を作成した。評者は15年前に行なった作業報告に“もしも此等の問題を噛みこなすに適当な「歯」…が見出された暁には、…此等の「骨董的」な諸現象が新生命を吹き込まれて学界の…檜舞台に押し出されないと限らない”という寺田寅彦のことばを引用しておいたが、いま「新生命を吹き込まれた」山本氏の労を多としたい。かつてケインズはTinbergen, *Statistical Testing of Business Cycle Theories*, League of Nations, Geneva, 1939を嘲笑して「統計的錬金術師」と呼ぶ無理解ぶりを示したが、戦前の整備されていない統計データを加工して計量的分析に耐えさすためにティンバーゲンがいかに苦勞したかを思う時、また労働集約的な推計作業の辛苦をなめさせられた評者自身のささやかな経験から察して、山澤・山本両氏の労苦に敬意を表し上記の積極的貢献を高く評価するものであるが、それでは書評の責めを果すことができないので、あえて臆を得て蜀を望む“無い物ねだり”を付け加える。

第1に貿易統計については1940-1949年という空白期間が残されていることが惜しい。これは戦中・戦後混乱期の“statistical blackout”であるといってしまえばそれまでである。「編集者のことば」を逆手に取るわ

けではないが、大蔵省税関部あたりの「書庫のなかで…ほこりにまみれた貴重なデータの発掘」はできないものであろうか? 戦時中や戦争直後のデータに明るい人(たとえば中村隆英氏やリチャード・ヒューバー氏)の助言を得て大蔵省やGHQの原資料を(一橋出の総理の止めないうちに急いで)発掘できないものであろうか?

第2に(これは著者たちも少し気にしている点であるが)2人の著者の専門のちがいを反映しすぎて「分析」の貿易の部分と国際収支の部分が異質でバラバラになっているように見受けられる。もう少し貿易の部に経済史的観点を、国際収支の部に国際経済学的分析を混ぜ合わせて共同論文とされたならば一そう光彩を増したのではなかろうか。

第3に既往資料の利用についてであるが、なぜか横浜正金銀行(現東京銀行の『正金週報』)や神戸商業大学商業研究所(現神戸大学経済経営研究所の『重要経済統計』)の貿易指数(数量、価格)に市民権が与えられていない。山澤氏が産業別分類を採用されたのは、本シリーズの『鉄工業』との関係もあろうが、主として貿易と工業成長との関係(とくに赤松要先生の天才的着想の「雁行形態論」)の実証にたまたま関心(それは充分尊敬すべきものであるが)を抱かれたからにすぎない。しかし他の分析目的にとっては貿易商品類別の指数の方が役立つ場合も多い。したがってこれらを「東洋経済指数」も含めて再掲載してその性質を吟味しておくべきではなかったかと思われる。同様の批評は国際連盟関係の資料(*World Production and Prices* や *Review of World Trade* の指数や Milton Hilgarat の業績)などについてもあてはまる。

こうした批評にもかかわらず、評者は山澤指数が東洋経済指数、正金指数、神戸指数と比較してよりすぐれた指数であることを否定するものではない。それは「分析」第4章(p.89)に示された輸出関数で価格弾力性について有意で理論的期待に合致する推定値が得られていることからである。既往の3指数(類別であるが)を用いた回帰計算でかつて悪戦苦闘した経験をもつ評者はこのことを高く評価し山澤指数を信頼するものである。

第4に、これは批評というよりも言い訳けであるが、山本氏は評者の金銀混計の修正値が1874, 1886年について誤差があることを指摘している。このうち1886年は単なるミスプリントであるが、1874年の数字は指摘の通りである。(15年前の作業の記憶は定かでないが)この数字は数次改訂をほどこしていることがワークシートに残っている。問題は「金貨1円ニ対スル銀貨平均相場」

が1879(明治12)年以降については『第8回帝国統計年鑑』(明治22年刊)に載せられているがそれ以前については発表されていないことである。しかし『明治前期財政経済史料集成』には「金1に対する銀比例」「金1に対する銀の市価」等が何系列か載っているので1874-1878の5年については、これらを用いて金1円の銀貨相場を推計しなければならなかったのである。この推計が何系列か可能なため(たとえば1.054とすると24,220になる)いくつかの推計値がえられた(事実、静岡経済研究所『経済月報』1966年7月号に印刷されている数字は24,220となっている)。そうするとこの数字にまた手を入れて最終推計値としたのではないかと思う。

何れにしても第2部「推計」編の表8-1やKlein and Ohkawa, *Economic Growth*, R. D. Irwin, 1968のp. 185のTable 6A-1の第1行目は計算が合わないので、金1円の銀貨相場を変更しなければならないであろう。

最後に山澤・山本両氏の辛抱強い労働集約的作業とその立派な成果に対し再び敬意を表して筆をおく。

〔建元正弘〕